

記紀神話と欧文挿絵本

井上 さやか

1 はじめに

『古事記』（712年）『日本書紀』（720年）は、現存する日本最古の神話や歴史を記した書である。これらが成立した背景に、文字をはじめとして大陸文化の多大かつ多彩な影響があることは周知のとおりである。その編纂動機にしても、異質な文化との接触が対外的な認識をもたらした側面は否定できない。日本の文学や文化は、いわば国際的な視野を持つことで醸成されてきたとも言い得るのである。しかしながら、現代において日本文学を研究する際に比較文化的なアプローチをすることは一般的とはいえない。そこで当館では「国際的・学際的・人際的」を掲げ、開館当初から積極的に比較文化的な研究テーマに取り組んできた。

第5回主宰共同研究「海外における記紀万葉の受容に関する比較研究—翻訳にあらわれる日本文学の特色について—」（平成26年度・27年度実施）で明らかにしたとおり、近代化の道を歩んだ明治時代以降は、いわゆる「お雇い外国人」らによって万葉歌や記紀神話が日本文化の特徴として研究され、各国語に翻訳され紹介されていた。それを踏まえ、第6回主宰共同研究（平成29年度・30年度実施）は「神話の視覚化に関する比較文化的研究—記紀万葉を軸に—」というテーマを掲げて進めた。

一方、日本の絵画もまた、古くは中国などの大陸文化の影響を受け、近世には西洋の影響も受けつつ、19世紀に至って葛飾北斎をはじめとした絵師たちの作品が西洋美術に影響を与えたことはよく知られている。ただ、近代国家・日本において作られた「日本美術史」という枠組みの中で当初は浮世絵が正当に扱われなかったことや、幕末と明治時代とが同じ19世紀でありながらその連続性に着目した研究が少なかったことが指摘されている。^①

そこで本稿では、記紀神話がどのように絵画化され、国外に紹介されていたかについて、やはり従来は注目されることが少ない欧文挿絵本の事例を中心に考えてみたい。

2 記紀神話と「ちりめん本」

記紀神話が近代においてどのように絵画化されていったかについては、すでに及川智早氏による詳細な論究がある。^②ただし、及川論は近代国家・日本が求め国内に普及したイメージを明らかにすることに主眼があり、国外での絵画化例については取り上げていない。そこで本稿では及川論も踏まえつつ、欧文挿絵本を軸にして国外における事例について考えたい。

明治18（1885）年に長谷川弘文社から刊行され始めた「日本昔噺」シリーズは、代表的な欧文挿絵本であり、縮緬様の和紙を使用した独特な書物として知られる。多くは全ページ多色刷りで、和紙を縮緬状に加工することから、袖珍本のように小型で、手触りもよく丈夫である。130年前の本とは思えないほどに美しい状態で国内外に多数現存しており、近年は「縮緬（ちりめん）本」という呼称で古書店などでも人気がある。

「ちりめん本」とは、印刷した和紙をちりめん状に仕立て、それを和綴じにした、他に類を見ない特殊な書物で、明治期の出版人長谷川武次郎によって発案されたと考えられる。その内容は、日本昔噺をはじめ、日本の風俗や年中行事、生活習慣、子供の遊びなどを、美しい彩色の挿画を入れて、主として欧文で紹介したもので、英語をはじめ、フランス語、ドイツ語等、さまざまな国の言語で記されたものが存在する。(『ちりめん本影印集成 日本昔噺輯篇』³⁾)

従来は海外向けの土産物の一種とみなされて、学術的な研究対象となることはほとんどなかった。しかし、石澤小枝子氏によれば、

武次郎が「日本昔噺」を企画したのは、外国人に日本の昔噺を広めるのが第一義ではなく、日本人の英語の勉強のためという意図がまずあったことがあきらかに見て取れる。

という。⁴⁾そのことは、早くにアン・ヘリング氏も指摘しており、⁵⁾海外向けの土産物や児童向けの絵本としての見方しかされていないことに異議を唱えてもいる。⁶⁾

「日本昔噺」シリーズの欧文翻訳を中心的に担ったのは、来日していた宣教師たちや外交官、チェンバレンやハーンなどの「お雇い外国人」やその周辺の人たちであり、彼らは『古事記』『日本書紀』や『万葉集』を研究・翻訳し、欧米に紹介した人々でもあった。ここでは、そうした人々がどのように記紀神話を訳し、どのような挿絵が添えられて「ちりめん本」として流布したのかについてみておきたい。

いわゆる「縮緬(ちりめん)本」としてもっとも著名なのが、“*Japanese Fairy Tale Series*”(全20冊・21種)である。先述のとおり邦題は奥付に「日本昔噺」とあり、実際に桃太郎や舌切雀など、現在でも昔話として親しまれている題材が多い。そのなかに『古事記』『日本書紀』『万葉集』に材を採った次の4冊もある。

- | | |
|---|------------------------------------|
| No.8. The Fisher Boy URASHIMA | 「浦島」チェンバレン訳述、小林永濯画 |
| No.9 The Serpent with Eight Heads | 「八頭ノ大蛇」チェンバレン訳述、小林永濯画 |
| No.11 The Hare of INABA | 「因幡の白兎」ジェイムズ夫人訳述、小林永濯画 |
| No.14 The Prince Fire-Flash & Fire-Fade | 「玉の井」ジェイムズ夫人訳述、鈴木華邨画 ⁷⁾ |

「浦島」は、『万葉集』巻九1740、1741番歌や「丹後国風土記逸文」にみえる伝説であり、細部が改変されながらも「浦島太郎」として現在でもよく知られる昔話のひとつである。『日本書紀』雄略天皇22年7月条にも記事があり、詳しくは「別巻」にあるとあるが残念ながら現存していない。

「八頭ノ大蛇」は、スサノヲによるヤマタノヲロチ退治の神話をモチーフとするが、当該書ではそれ以上の内容を含んでおり、ヤマタノヲロチ退治の前段となる三貴子の誕生や天石屋戸神話までも紹介されている。

「因幡の白兎」は、『古事記』上巻に載る、オホアナムジがオホクニヌシとなった由来を語る神話で、『日本書紀』にはみられない。ワニが登場することで知られ、それは鰐か鯨かという議論もある。

「玉の井」は、『古事記』『日本書紀』にみえる日向神話の一つである、いわゆる海幸山幸神話である。シリーズ中で当初は「彦火火出見尊」とあった邦題が、版を重ねるうちに「玉の井」と変更されたようである。

いずれも現代人にも比較的なじみのあるエピソードばかりであるといえ、現在でも絵本などでみかけることがある。その場合にはかいつまんだ内容となっており、記紀そのままではない。同様に、欧文挿絵本においても、記紀などの逐語訳ではなくダイジェスト版といってよい内容である。小林永濯を中心とした絵師たちによる画も美麗であり、これらが結果的に海外向けの土産物となったことは自然な成り行きであったかと思われる。

なお、出版人である長谷川武次郎についてなどシリーズ全体の詳細については、アン・ヘリング氏の

一連の著述⁸⁾や石澤小枝子氏のご著書⁹⁾などを参照されたい。

3 石屋戸開きの図の比較

近世は『日本書紀』をモチーフとした作品の方が多かったともいわれる¹⁰⁾が、チェンバレンは明治15(1882)年に英語訳『古事記』を出版していることから、「日本昔噺」シリーズの「八頭ノ大蛇」においても、『古事記』をベースとしていると考えられる。そこで、本文の記述と挿画について検討してみたい。

「八頭ノ大蛇」について、石澤小枝子氏は次のように指摘している。

9 *The Serpent with Eight Heads* 「八頭ノ大蛇」 B.H. チェンバレン訳述 小林永濯絵

この日本神話の一つをこのシリーズに入れるように勧めたのは、訳者のチェンバレンであろう。

怪物の生け贄に捧げられた娘を勇敢な英雄が助けるという話は、ギリシャの英雄叙事詩が語るアンドロメダを助けたペルセウスから始まり、全世界的に人々に好まれる話である。

『古事記』『日本書紀』の研究者であるチェンバレンは、この小さな本であまりに多くを語ろうとして成功していない。天照大神、月読命（名を書いていない）、須佐之命の説明から始め、天照大神が岩戸に隠れ、神々がどのようにして光を取り戻したかのエピソードから書き起こし、狼藉の須佐之命を放逐する話につないでいる。

須佐之命はそこで川辺で泣いている夫婦に出会い、毎年現れては娘を攫う八頭の大蛇のことを聞き、計略と剛勇で怪物を退治し、人身御供になるところだった娘を助けるまでをこの小さな本で超スピードで語っている。

神々をFairyと訳しているところにも違和感を感じる。物語を堪能するにはあまりに粗筋だけなのに、それでも大蛇の尾から出た剣が、天皇の三種の神器の一つになったことは書き落としていない。

永濯の絵は、表紙の表裏にまたがる八頭の大蛇の構図や、墨と大蛇が吐く炎の朱だけに色数を抑えた彩色といい品格がある。天の岩戸の場面もお定まりの絵だが均整がとれている。裏表紙の裏に麦藁で編んだ蛇の玩具の絵があるのは永濯の遊びかもしれない。¹¹⁾

まず表紙・裏表紙において描かれているのは、八つの頭を持つ竜である。『古事記』には「遠呂知」とありこれは蛇を意味するが、及川氏によれば、明治期の当該エピソードを描いた作品にはことごとく竜が描かれているという。¹²⁾

見返しには「鮮斎永濯」と、小林永濯(1843-1890)の号が記されている。小林永濯の代表作のひとつに「神武天皇東征討図」(東京国立博物館蔵)があり、明治10年(1877年)の第1回内国勸業博覧会に「天照大神、素戔鳴尊、問答」と「神武天皇命鳥ノ図」を出品しており¹³⁾、『鮮斎永濯画譜 初篇』(1884)にイザナキ・イザナミの国生み神話を描くなど、「八頭ノ大蛇」の出版前から古代日本を題材とした作品を手がけていたことがうかがえる。「日本昔噺」シリーズ20冊21種のうち、最多の13冊を永濯の絵が飾っている。

表紙を開くと、左ページに八稜鏡と直刀の絵があり、右側から始まる本文第1ページには、雲間から顔を出す太陽が描かれている。石澤氏の指摘にもあるとおり、「八頭ノ大蛇」という題を冠しながらも、三貴子の統治から大蛇の尾から出た剣が天皇の三種の神器の一つになったことまでを一気に記述していることから、本文の内容に沿った挿画が描かれているといえる。

書名からいってもメインはスサノヲのヤマタノヲロチ退治ではあろうが、チェンバレンが本書にどう

しても盛り込みたかったのは、近世・近代において繰り返し視覚化された天石屋戸神話でもあったかと思われる。そこで、本稿では石屋戸開きの図に着目してみたい。



図1 チェンバレン訳述、小林永濯画『八頭ノ大蛇』1886年(万葉文化館蔵)

図1にあるように見開きを使って印刷されており、右側のページに石屋から後光のさす半身をのぞかせるアマテラスを配し、その手を取り引き出す人物と石の戸を抱えている人物、縄を持つ人物、鏡を持つ人物が、そして左側のページには伏せた桶の上で体をしならせる人物と、鏡や紙垂のかかる木を支える人物や鶏が描かれている。抑えた色彩の中で、2枚の鏡の縹色と、桶の茶色とその上に立つ女性の薄紅色が目を引き、素人目に画面左の踊る人物に焦点があるように見える。いわずと知れたアメノウズメノミコトである。

しかし、英語本文を見る限り、アメノウズメの名はどこにも書かれていない。『古事記』本文では、笑い声を不審がったアマテラスに、あなたより貴い神がいるからだと言を掛けるのもアメノウズメだが、本書では単に神々の発言とされている。神名が省略されているとはいえ、『日本書紀』(巻第一神代上第七段正文)においてはアマテラスの独白のみで対話はないことから、外部からの声に応答して石屋戸が開かれることになるのは、明らかに『古事記』をベースにしていることがわかる。

天宇受売命、手次に天の香山の天の日影を繫けて、天の真拆を鬘と為て、手草に天の香山のあめのうずめのみこと たすきの葉を結ひて、天の石屋の戸にうけを伏せて、踏みとどろこし、神懸り為て、胸乳を掛き出だし、裳の緒をほとに忍し垂れき。爾くして、高天原動みて、八百万の神共に咲ひき。あめ ひかげ か

是に、天照大御神、怪しと以為ひ、天の石屋の戸を細く開きて、内に告らししく、「吾が隠り坐すに因りて、天の原自らあや おも闚く、亦、葦原中国も皆闚けむと以為ふに、何の由にか、天宇受売は楽あこび

を為、亦、八百万の神は諸咲ふ」とのらしき。爾くして、天宇受売が白して言はく、「汝が命に益して貴き神の坐すが故に、歡喜び咲ひ樂ぶ」と、如此言ふ間に、天兒屋命・布刀玉命、其の鏡を指し出だし、天照大御神に示し奉る時に、天照大御神、逾よ奇しと思ひて、稍く戸より出でて、臨み坐す時に、其の隠り立てる天手力男神、其の御手を取り引き出だすに、即ち布刀玉命、尻くめ繩を以て其の御後方に控き度して、白して言ひしく、「此より以内に還り入ること得じ」といひき。

（『古事記』上巻）⁽¹⁴⁾

再び永濯の画に視線を戻すと、本来の『古事記』の記述にも、チェンバレンによる英語本文にもないものが描かれていることに気付く。2枚目の鏡とそれを支える人物、そして石の戸を抱える人物である。天の香山の榊に勾玉と鏡、白幣・青幣をかけたものを支え持つ神は、『古事記』には明記されていない。アマテラスに向けられた鏡も「其の鏡」とあり、榊にかけた鏡を差し出したと読める。なにより、石屋戸の前に陣取ってアマテラスが石の戸から覗き見た際にすかさず手を取り引き出だしたタヂカラヲは、石の戸を抱えたり持ち上げたりはしていないのである。永濯の画では、いわばタヂカラヲが二人存在するような恰好である。石の戸を持ち上げるタヂカラヲは近世の絵画に頻出する。

村上京子氏によれば、小林永濯は「物語る表情、動きを描くことのできる挿し絵画家」であり「文章にないことをイメージできる画家」であるという。⁽¹⁵⁾挿絵を描くにあたり永濯は、長谷川武次郎を介してチェンバレンの英語本文の内容を踏まえ、『古事記』をもとに構想を練ったのではなかったか。そうでなければ、ヤマタノヲロチをテーマにした数丁の書籍で、図1のような挿絵は生まれなかつたらう。しかしその構図やモチーフには、江戸時代の浮世絵の影響もあったとみられる。



図2 三代歌川豊国画『岩戸神楽ノ起頭』無刊記⁽¹⁶⁾（万葉文化館蔵）

図2は、安政3（1856）年刊で知られる『岩戸神楽ノ起頭』である。登場人物は役者絵風に描かれており、実際に七代目市川團十郎らを描いたものという。奢侈禁止令のもと江戸処払いになっていた時期もあり大々的には描けなかつたものか、神話を表現する体で描き、役者絵には付き物の役名や役者名は一切書かれていない。注目したいのは、中央にアマテラスを配し、タヂカラヲが岩戸を持ち上げていることである。アメノウズメは桶には乗っていないし、冠のような物をかぶり、手には小竹ではなく神鈴を持っている。左端に白髪白髭で矛を持った隈取のある人物は、本来はこのシーンにいないサルタヒコである。⁽¹⁷⁾八稜鏡ならぬ十二稜鏡のような鏡が下がり、右端には雅楽で用いる大太鼓のような物も見え、これらが当時の舞台上の衣装や小道具であったことをうかがわせる。

前掲の永濯の画がいかに『古事記』の記述に沿っており、こうした歌舞伎の影響が最小限であったかがわかるが、それでも石屋の戸を抱えるタヂカラヲを描かずにはいられなかったものか。そしてアマテラスよりもアメノウズメが中心のような構図であることも興味深い。絵師として、神楽の起源であり芸能の神とされたアメノウズメの躍動感を描くことにこそ魅力を感じていたのかもしれない。



図3 グリフィス『日本のお伽の世界』1880年(個人蔵)

百万の神々や焚火などは役者絵とは異なるものの、前掲の『岩戸神楽ノ起顕』に連なる画であるといえよう。この絵師は「OZAWA」と記されていることから、日本人であったとみえるが(大沢南谷か)、木々の描写や銅版画のような描線からは、西洋絵画の洗礼を受けていた様子がうかがえる。

参考に、同時期にアメリカで出版されたグリフィス『日本のお伽の世界』(1880)の同じシーンを比較しておきたい。同書籍に12葉あるイラストの中には日本神話を題材としたものも含まれており、図3はその口絵である。隈取のあるタヂカラヲが持ち上げた岩の向こうから三筋の光が差す様子が描かれている。

八稜鏡というよりはヒマワリの花のような鏡や大太鼓のような物も見え、アメノウズメの足下に桶はなく、手には紙垂を持っている。居並ぶ八

4 民話採集の機運のなかで

ここで、先掲のグリフィス『日本のお伽の世界』のような書が海外において出版され、欧文挿絵本が誕生し欧米に流通した時代的な背景についても触れておきたい。

明治時代において、海外へ紹介された欧文挿絵本は数多くあり、かなりの影響力もあったという。⁽¹⁸⁾

欧州において最初に日本が知られたのはマルコポーロの『東方見聞録』(13世紀末頃)においてとされ、実質的にはケンペル『日本誌』(1727)を嚆矢として、嘉永6(1853)年に黒船が来航し日本が開国したことで欧州においてジャポニスムの隆盛をみたとされる。

ただしそれ以前にも、天文15(1546)年以降のポルトガルとの交易や、天正10(1582)年の天正遣欧少年使節団、慶長18(1613)年の慶長遣欧使節団を派遣するなどの交流はあった。また、カロン『日本大王国志』(1645)など、貿易相手国の基礎知識として日本の歴史や文化について紹介した書物が複数あったことが指摘されており、⁽¹⁹⁾最近では、スウィフト『ガリバー旅行記』(1726)が奈良絵本・絵巻の『御曹司島渡』や『蓬莱山』の影響を受けていた可能性も指摘されている。⁽²⁰⁾

黒船来航以前の1832年、オランダに帰国していたシーボルトがライデンにて「日本博物館」を開設し、『日本』の刊行を開始したことも重視される。そのシーボルトとともにヨーロッパに日本を紹介した功績が指摘されるフィッセルもまた、『日本国の知識に関する寄与』(1833)をパリで刊行した。⁽²¹⁾そこには、興味深い図が掲載されている(図4)。

この挿絵の下方には

伏羲と神農、最初の日本の人間夫婦。そのほか風神と雷神の図。および鶴すなわち幸福の象徴によっ



図4 フィッセル『日本国の知識に関する寄与』1833年
(京都外国語大学付属図書館蔵)

上・図5/下・図6 『北斎漫画』第三編 1815年
(国立国会図書館デジタルコレクション)

て守られている将軍の紋章の絵。

と記されている。⁽²²⁾「伏羲と神農」は日本の神々ではなく中国の伝説上の皇帝であり、もちろん「最初の日本の人間夫婦」でもない。しかしフィッセルは本文中に、日本神話の最初の三神について触れつつ、その天つ神々の統治の間、中国においては三皇が統治していたと日本の年代記が引用していると述べて、第一代の伏羲、第二代の神農などの名を明記している。そうしたフィッセルの説明に沿ってこの画が描かれたとみてよいだろう。

顔つきや着衣の様子を見ると日本的とは到底言い難いものであるが、この図像は『北斎漫画』（第三編）の風神・雷神（図5）と伏羲・神農（図6）の図を手本としていたことが指摘されている。⁽²³⁾北斎が描いていることからいっても、〈日本の神〉として描くことに違和感がなかったのかもしれない。中国の神観念からいえば、「天」や伝説上の「帝」がgodに相当するとも指摘されており、⁽²⁴⁾そうした理解が根底にあった可能性もある。

フィッセルの著書にも予告されているが、翌1834年にはティチング『日本王代一覽』のフランス語版がクラブプロットによって出版された。歴代天皇の事績を記した書であるだけでなく、万葉歌が初めて欧州に紹介された書でもあった。⁽²⁵⁾そして1849年には、『万葉集』を抄訳したプフィッツマイアー『日本最古の詩歌に関する論文』がドイツで出版され、1853年の開国を挟んではチェンバレンの『日本人の古典詩歌』（1880）と英訳『古事記』（1882）とが相次いで出版されるに至った。

チェンバレンは『古事記』の中で、日本における「神」の概念を英語でどう訳すかという問題について、日本語に対応する適切なことばが英語に存在せず翻訳が難しい場合があるが、なかでも最も難しいのが「神」を表現することだと言及し、⁽²⁶⁾異文化を理解した上で母語である言語文化の中に再構築するという翻訳の難しさを指摘している。⁽²⁷⁾それがたとえ視覚化された神像の場合であっても、似て非なる図像に〈翻訳〉されてしまうことは、先掲の『北斎漫画』と『日本国の知識に関する寄与』との関係にみえたとおりである。

なお、『日本国の知識に関する寄与』は日本でも早くから注目され、幕末には蘭学者たちにより『日本風俗備考』の書名で全訳された。原著の挿絵も模写されたが、その際には日本人絵師により日本的な作風に再(翻訳)されている。⁽²⁸⁾

同じ頃、チェンバレンと同じくお雇い外国人として来日経験があり『皇国』(1876)で知られるグリフィスが、ニューヨークで『日本のお伽の世界』⁽²⁹⁾(1880)を出版してもいた。それより早くにロンドンで出版されたミットフォード『昔の日本の物語』(1871)が桃太郎や舌切り雀などの昔話だけを紹介していたのに対して、グリフィスはイザナキ・イザナミの国生み神話やアマテラスの天石屋戸神話なども取り上げている。その口絵は図3で見たとおりである。

また、1884年にはウィーンでランゲグによる『扶桑茶話』が出版された。こちらは桃太郎などとともに、「漁夫、浦島」「葛飾の乙女」「宇奈比の乙女」など『万葉集』に材を採った挿話が紹介されている。⁽³⁰⁾日本での茶会に参加した際に聴いた話を書き記したとあり、本文に『古事記』『日本書紀』の神話はみられないものの、書名とした「扶桑」の語の説明の際には桑が稚産霊命から生じたことに言及しており、この神がイザナキ・イザナミ神の裔であることにも触れている。これは『日本書紀』第五段一書第二の内容に相当し、『古事記』ではオオゲツヒメの亡骸から、しかも桑ではなく蚕が生じると記されていることから、ランゲグが『日本書紀』かそれに類する神話などに関する知識も有していたことをうかがわせる。

加藤耕義氏によれば、その翌年には、ナウマンの後任として東京大学理学部に赴任した経験を持つブラウンスが『日本の昔話と伝説』(1885)を上梓しており、同書のなかでイザナキ・イザナミにまつわる神話も翻訳紹介されているという。⁽³¹⁾

ランゲグは医学、ブラウンスは地質学・古生物学の専門家であったが、ともに当時のドイツのフォルクスガイスト(民族精神)のもとで日本の神話や伝説に注目していたことが知られている。

こうした流れのなかで、ブラウンスの著書が出版された年と同じ1885(明治18)年に、欧文挿絵本“*Japanese Fairy Tale Series*”の刊行が開始されたのであった。欧文挿絵本が受け入れられる機運が十分に整っていた中での刊行だったといえよう。

欧文挿絵本が生まれたのは国内の語学学習受容を見込んでのことであったとしても、児童書としてだけでなく欧米で人気を博し多種類の言語に訳され版を重ねていったことは、単なる物珍しさや異国趣味だけでは説明できないだろう。その背景には、グリム兄弟に象徴される19世紀欧米における民話・昔噺に対する関心の高まりがあったと考えられる。

5 おわりに

本稿では「神話」の「視覚化」をテーマとした共同研究の一環として、明治時代の欧文挿絵本(ちりめん本)を取り上げた。とくに天石屋戸神話の挿絵を例に、わずかではあるが洋の東西の事例を比較してみたことで、神話がどのように絵画化され普及していったかをほんの少しだけ垣間見ることはできたが、到底十分な考察ができたとはいえない。

ただ、海外においては、日本国内ではむしろ衰退しつつあった浮世絵がもてはやされ、ジャポニスムの隆盛をもたらしたことは皮肉ともいえる。そして絵画だけでなく、民話や昔噺として、開国前から『古事記』『日本書紀』や『万葉集』のエピソードが同様に海外で享受されていたことは、近代国家・日本の形成期にこれらが「古典」として祭り上げられていったことに一役買っていた可能性を考える必要があるだろう。もちろんそれは一側面に過ぎず、大前提として国粹主義的な文脈があったことは疑い得な



参考 Japanese Fairy Tale Series 20冊（奈良県立万葉文化館蔵）

い。しかしながら、国内事情とともに当時の国外の機運を踏まえることで、「国文学」の研究史を踏まえざるを得ない自らの現在地をより鮮明にすることも可能になるのではないかと考える。それが、第5回・第6回の主宰共同研究を経て、筆者が得た肝の部分であったように思う。

註

- (1) 菅原真弓『浮世絵版画の十九世紀 風景の時間、歴史の時間』星雲社、2009年
- (2) 及川智早『日本神話はいかに描かれてきたか—近代国家が求めたイメージ』新潮社、2017年
- (3) 中野幸一・榎本千賀編『ちりめん本影印集成 日本昔噺輯篇』勉誠出版、2014年
- (4) 石澤小枝子『ちりめん本のすべて—明治の欧文挿絵本』三弥井書店、2004年
- (5) アン・ヘリング「縮緬本雑考（上）」『日本古書通信』昭和57年5月号、1982年5月／同「児童図書翻訳事始—他の言語へのひろがり—」『日本の子どもの本歴史展図録』日本国際児童図書評議会・東京都文化振興会、1986年
- (6) アン・ヘリング「縮緬本雑考（中）」『日本古書通信』昭和57年6月号、1982年6月 など
- (7) 当館所蔵の当該書には邦題および絵師名が記載されていないが、石澤氏前掲書の記述に従って提示する。
- (8) アン・ヘリング「縮緬本雑考」上・中・下『日本古書通信』昭和57年5月号～7月号、1982年5月～7月／同「続・縮緬本雑考」1～16『日本古書通信』昭和57年9月号～昭和60年12月、1982年9月～1985年12月（不定期連載）
- (9) 石澤氏前掲書
- (10) 稲畑ルミ子「描かれた『古事記』」『語り継ぐココロとコトバ 大古事記展—五感で味わう、愛と創造の物語—』奈良県立美術館、2014年

- (11) 石澤氏前掲書
- (12) 及川智早「ヤマトノヲロチ退治の演出法」『日本神話はいかに描かれてきたか—近代国家が求めたイメージ』新潮社、2017年
- (13) 松浦あき子「小林永濯の人と作品」『MUSEUM 東京国立博物館美術誌』534号、1995年
- (14) 山口佳紀・神野志隆光校注『新編日本古典文学全集1 古事記』(小学館、1997年)に拠った。
- (15) 村上京子「ちりめん本日本昔話」『衍書月刊』5月号、1999年4月
- (16) 三代歌川豊国画、安政4(1857)年刊のものが知られる。
- (17) 及川智早「サルタヒコとアメノウズメは夫婦神か」『日本神話はいかに描かれてきたか—近代国家が求めたイメージ』新潮社、2017年
- (18) アン・ヘリング「児童図書翻訳事始—他の言語へのひろがり—」『日本の子どもの本歴史展図録』日本国際児童図書評議会・東京都文化振興会、1986年(『江戸児童図書へのいざない』くもん出版、1988年、所収)
- (19) クレインス・フレデリック『十七世紀のオランダ人が見た日本』臨川書店、2010年
- (20) 石川透「奈良絵本・絵巻の研究と収集2—『ガリヴァー旅行記』と『御曹司島渡』」『日本古書通信』1084号、2019年11月
- (21) FISSCHER, J. F. van Overmeer(1833) *Bijdrage tot de kennis van het Japansche Rijk*. Amsterdam
- (22) 庄司三男・沼田次郎訳注『フィッセル 日本風俗備考1』東洋文庫326、平凡社、1978年
- (23) 国立西洋美術館『北斎とジャポニズム HOKUSAIが西洋に与えた衝撃』図録、2017年
- (24) 原田敏明「上代神観の諸相」『日本古代宗教』中央公論社、1948年
- (25) 拙稿「古代と近代における文化の創造—大伴家持の賀陸奥国出金詔書歌を軸に—」『万葉古代学研究年報』17号、2019年3月
- (26) Basil Hall Chamberlain (1882). *THE KO-JI-KI: Records of Ancient Matters*.
- (27) 拙稿『万葉古代学研究年報』第15号、2017年
- (28) 「『日本風俗備考』原書と翻訳の比較」(電子展示会「江戸時代の日蘭交流」第2部1(3)) 国立国会図書館、2009年
- (29) William Elliot Griffis(1880) *Japanese Fairy World*. Schenectady, N.Y.
※邦題は、アン・ヘリング「児童図書翻訳事始—他の言語へのひろがり—」『江戸児童図書へのいざない』(くもん出版、1988年)に拠る。
- (30) 奥沢康正『外国人のみたお伽ばなし—京のお雇い医師ヨンケルの『扶桑茶話』—』思文閣出版、1993年
- (31) 加藤耕義「日本の昔話・伝説・神話の明治期ドイツ語訳—ダーフィット・ブラウンス『日本の昔話と伝説』(1885)—」(明治150年記念シンポジウム「文学におけるジャポニズム」における口頭発表)、奈良県立万葉文化館、2018年8月5日